

二十六夜

宮沢賢治

青空文庫

※

旧暦の六月二十四日の晩でした。

北^{きたかみ}上^{かみ}川の^{かみ}水は黒の寒天よりももつとなめらかにすべり獅子鼻^{ししはな}は微^{かす}かな星のあかりの底にまつくろに突き出てゐました。

獅子鼻の上の松林は、もちろんもちろん、まつ黒でしたがそれでも林の中に入って行きますと、その脚の長い松の木の高い梢^{こすゑ}が、一本一本空の天の川や、星座にすかし出されて見えてゐました。

松かさだか鳥だかわからない黒いものがたくさんその梢にとまってゐるやうでした。そして林の底の萱^{かや}の葉は夏の夜の雫^{しづく}をもうポトポト落して居^をりました。

その松林のずうつとずうつと高い処^{ところ}で誰^{たれ}かゴホゴホ唱へてゐます。

「爾^その時に疾^{しつしやう}翔^{たいりき}大力^{りき}、爾迦夷^{るかひ}に告^あげて曰^{いは}く、諦^{あきら}に聴^かけ、善^よく之^{これ}を思念^{しんねん}せよ、我^{われ}今^{いま}汝^{なんぢ}に、梟^{けう}鷄^{もろ}諸^{もろ}の悪^{あく}禽^{きん}、離^り苦^く解^げ脱^{だつ}の道^{みち}を述^のべん、と。

爾迦夷^{るかひ}、則^{すなは}ち、両翼^{りやうよく}を開張^{あひら}し、度^{うやうや}しく頸^{くび}を垂^たれて、座^ざを離^{はな}れ、低^ひく飛揚^{とびあ}して、疾翔^{しつしやう}大力^{りき}

を讚嘆すること三匝にして、徐に座に復し、拜跪して唯願ふらく、疾翔大力、疾翔大力、たゞ我等が為に、これを説きたまへ。たゞ我等が為に、之を説き給へと。

疾翔大力、微笑して、金色の円光を以て頭に被れるに、その光、遍く一座を照し、諸

鳥歡喜充滿せり。則ち説いて曰く、

汝等審に諸の悪業を作る。或は夜陰を以て、小禽の家に至る。時に小禽、既に終

日日光に浴し、歌唄跳躍して疲労をなし、唯唯甘美の睡眠中にあり。汝等飛躍して之を握

む。利爪深くその身に入り、諸の小禽、痛苦又声を発するなし。則ち之を裂きて擲に噉

食す。或は沼田に至り、螺蛤を啄む。螺蛤軟泥中にあり、心柔にして、唯温水を

憶ふ。時に俄に身、空中にあり、或は直ちに身を破る、悶乱声を絶す。汝等之を噉食

するに、又懺悔の念あることなし。

斯の如きの諸の悪業、挙げて数ふるなし。悪業を以ての故に、更に又諸の悪業を作る。

継起して遂に竟ることなし。昼は則ち日光を懼れ又人及諸の強鳥を恐る。心暫くも安らか

なるなし、一度梟身を尽して、又新に梟身を得、審に諸の苦患を被りて、又尽ること

なし。」

俄かに声が絶え、林の中はしいんとなりました。たゞかすかなかすかなすゝり泣きの声

が、あちこちに聞えるばかり、たしかにそれは梟ふくろふのお経だったので。

しばらくたつて、西の遠くの方を、汽車のごうと走る音がしました。その音は、今度は東の方の丘に響いて、ごどんごとんとこだまをかへして来ました。

林はまたしづまりかへりました。よくよく梢をすかして見ましたら、やつぱりそれは梟ふくろふでした。一疋ひきの大きなのは、林の中の一番高い松の木の、一番高い枝にとまり、そのまはりの木のあちこちの枝には、大きなや小さいのや、もうたくさんのふくろふが、じつととまつてだまつてゐました。ほんのときどき、かすかなかすかなため息の音や、すゝり泣きの声でするばかりです。

ゴホゴホ声こゝろが又起りました。

「たゞ今のご文もんは、梟けうし守護章しんごというて、誰たれも存知の有り難いお経の中の一とこぢや。たゞ今から、暫時しばしの間、そのご文の講釈こうしゃくを致す。みなみなの衆しゆ、ようく心を留めて聞かしゃれ。折角せきかくに生れて来ても、たゞ腹はらが空すいた、取つて食くふ、睡ねむくなつた、巢ねに入るではなんの所しよ證よせんもないことぢやぞよ。それも鳥とりに生れてたゞやすやすと生きるといつても、まことはたゞの一日いちにちとても、たゞごとではないのぞよ、こちらが一日いちにち生きるには、雀すずめやつぐみや、たにしやみゝずが、十や二十も殺されねばならぬ、たゞ今のご文もんにあらしやるとほりぢや。

こゝの道理をよく聴きわけて、必らずうかうか短い一生をあだにすぐすではないぞよ。これからご文に入るぢや。子供らも、こらへて睡るではないぞ。よしか。」

林の中は又しいんとなりました。さっきの汽車が、まだ遠くの遠くの方で鳴つてゐます。「爾その時に疾翔しつしよう大力たいりき、爾迦夷るかゐに告げて曰いはくと、まづ疾翔大力とは、いかなるお方ぢやか、それを話さなければならんぢや。

疾翔大力と申しあげるは、せんだいほさつ施身大菩薩のこどぢや。もと鳥の中から菩提心ぼだいしんを発ほつして、ほつぐわん願がんした大力の菩薩ぢや。疾翔とは早く飛ぶといふことぢや。捨身菩薩がもとの鳥の

形に身をなして、空をお飛びになるときは、一揚というて、一はゞたきに、六千由旬ゆじゆんを行きなさる。そのいはれより疾翔と申さるゝ、大力といふは、お徳によつて、たとへ火の中水の中、たゞこの菩薩を念ずるものは、捨身大菩薩、必らず飛び込んで、お救ひになり、その淨じやうみやう明みやうの天上にお連れなさる、その時火に入つて身の毛一つも傷きずかず、水くぐに潜ひそつて、羽ちり、塵ちりほどもぬれぬといふ、そのお徳をば、大力とかう申しあげるのぢや。されば疾翔大力とは、捨身大菩薩を、鳥より申しあげる別号ぢや、まあさう申しては失礼なれど、鳥より仰おほぎ奉る一つのあだ名ぢやと、斯かう考へてよろしからう。」

声こゑがしばらくとぎれました。林はしいんとなりました。たゞ下の北上川ふちの淵ふちで、鱒ますか何

かのはねる音が、バチャンと聞えただけでした。

梟ふくろうの、きつと大僧正か僧正でせう、坊さんの講義が又はじまりました。

「さらば疾翔大力は、いかなればとて、われわれ同様賤いやしい鳥の身分より、その様なる結構のお身となられたか。結構のことぢや。ご自分も又ほかの一切のものも、本願のごとくにお救ひなされることなのぢや。さほど尊いご身分にいかなことでもなられたかとなれば、なかなか容易のことではあらぬぞよ。疾翔大力さまはもとは一足の雀すずめでござらしやつたのぢや。南天竺なんてんぢくの、ある家の棟むねに棲すまはれた。ある年非常な饑饉ききんが来て、米もとれねば木の実もならず、草さへ枯れたことがござつた。鳥もけものも、みな飢餓死にぢや人もばたばた倒れたぢや。もう炎天と飢渴きかつの為に人にも鳥にも、親兄弟の見さかひなく、この世からなる餓鬼がきだう道ぢや。その時疾翔大力は、まだ力ない雀でござらしやつたなれど、つくづくこれをご覧じて、世の浅間あさましさはかなさに、泪なみだをながしていらしやれた。中にもその家の親子二人、子はまだ六つになるならず、母親とてもその大飢渴だいきかつに、どこから食じきを得るでなし、もうあすあすに二人もろとも見す見す餓死を待つたのぢや。この時、疾翔しつしよう大力たいりきは、上よりこれをながめられあまりのことにしばしは途方にくれなされたが、日ごろの恩を報ずるは、たゞこの時と勇みたち、つかれた羽をうちのばし、はるか遠くの林まで、親

子の食をたづねたげな。一念天に届いたか、ある大林のその中に、名さへも知らぬ木なれども、色もにほひもいと高き、十の木の実をお見附けなされたぢや。さればもはや疾翔大力は、われを忘れて、十たびその実をおのがあるじの棟に運び、親子の上より落されたぢや。その十たび目は、あまりの飢ゑと身にあまる、その実の重さにまなこもくらみ、五たび土に落ちたれど、たゞ報恩の一念に、ついご自分にはその実を啄みなさらなんだ、おもひとゞいてその十番目の実を、無事に親子に届けたとき、あまりの疲れと張りつめた心のゆるみに、ついそのまゝにお倒れなされたぢや。されどもややあつて正気に復し下の模様を見てあれば、いかにもその子は勢も増し、たゞいたけなく悦んでゐる如くなれども、親はかの実も自らは口にせなんぢや、いよいよ餓ゑて倒れるやうす、疾翔大力これを見て、はやこの上はこの身を以て親の餌食とならんものと、いきなり堅く身をちゞめ、息を殺してはりより床へと落ちなされたのぢや。その痛さより、身は砕くるかと思へども、なほも命はあらしやつた。されども慈悲もある人の、生きたと見てはとても食べはせまいとて、息を殺し眼をつぶつてゐられたぢや。そしてたうとう願かなつてその親子をば養はれたぢや。その功德より、疾翔大力様は、つひに仏にあはれたぢや。そして次第に法力を得て、やがてはさきにも申した如く、火の中に入れてもその毛一つも傷つかず、水に入れてもそ

の羽一つぬれぬといふ、大力の菩薩ぼさつとなられたぢや。今このご文は、この大菩薩が、悪あくご業ふのわれらをあはれみて、救護の道をば説かしやれた。その始めの方ぢや。しばらく休んで次の講座で述べるといたす。

南無疾翔大力、南無疾翔大力。

みな衆しばらくゆるりとやすみなされ。―

いちばん高い木の黒い影が、ばたばた鳴つて向ふの低い木の方へ移つたやうでした。やつぱりふくろふだつたのです。

それと同時に、林の中は俄にはかにばさばさ羽の音がしたり、嘴くちばしのカチカチ鳴る音、低くごろごろつぶやく音などで、一杯になりました。天の川が大分まはり大熊星おほぐまぼしがチカチカまたゝき、それから東の山脈の上の空はぼおつと古めかしい黄金きんいろに明るくなりました。

前の汽車と停車場で交換したのでせうか、こんどは南の方へごとごと走る音がしました。何だか車のひゞきが太へん遅く貨物列車らしかつたのです。

そのとき、黒い東の山脈の上に何かちらつと黄いろな尖とがつた変なかたちのものがあらはれました。梟ふくろふどもは俄にはにざわつとしました。二十四日の黄金きんの角つの、鎌かまの形の月だったので。忽たちまちすうつと昇つてしまひました。沼の底の光のやうな朧おぼろな青いあかりがぼおつと林

の高い梢こずえにそゞぎ一疋びきの大きな梟ふくろふはねが翅はねをひるがへしてゐるのもひらひら銀いろに見えました。さっきの説教の松の木のまはりになった六本にはどれにも四疋ひきから八疋ぐらゐるまで梟がとまつてゐました。低く出た三本のならんだ枝に三疋の子供の梟がとまつてゐました。きつと兄弟だつたでせうがどれも銀いろで大きはみな同じでした。その中でこちらの二疋は大分厭あきてゐるやうでした。片つ方の翅をひらいたり、片脚でぶるぶる立ったり、枝へ爪つめを引っかけてくるつと逆さになつて小笠原島のかうもりのまねをしたりしてゐました。

それから何か云いつてゐました。

「そら、大の字やつて見せようか。大の字なんか何でもないよ。」

「大の字なんか、僕ぼくだつてできらあ。」

「できるかい。できるならやつてごらん。」

「そら。」その小さな子供の梟はほんの一寸ちよつとの間、消防のやるやうな逆さ大の字をやりました。

「何だい。そればつかしかい。そればつかしかい。」

「だって、やつたんならいゝんだらう。」

「大の字にならなかつたい。たゞの十の字だつたい、脚が開かないぢやないか。」

「おい、おとなしくしろ。みんなに笑はれるぞ。」すぐ上の枝に居たお父さんのふくろふがその大きなぎらぎら青びかりする眼でこつちを見ながら云ひました。眼のまはりの赤い隈くまもはつきり見えました。

ところがなかなか小さな鼻の兄弟は云ふことをききませんでした。

「十の字、ほう、たての棒の二つある十の字があるだらうか。」

「二つに開かなかつたい。」

「開いたよ。」

「何だ生意気な。」もう一疋は枝からとび立ちました。もう一疋もとび立ちました。二疋はばたばた、けり合つてはねが月の光に銀色にひるがへりながら下へ落ちました。

おつかさんのふくろふらしいさつきのお父さんのとならんでゐた茶いろの少し小型のがすうつと下へおりて行きました。それから下の方で泣声が起りました。けれども間もなくおつかさんの鼻はもとの処ところへとびあがり小さな二疋ものぼつて来て二疋とももとのところへとまつて片脚で眼をこすりました。お母さんの鼻しながも一度叱しかりました。その眼も青くぎらぎらしました。

「ほんたうにお前たちつたら仕方ないねえ。みなさんの見ていらつしやる処でもうすぐき

つと喧嘩けんくわするんだもの。なぜ穂吉ちゃんのやうに、じつとおとなしくしてゐないんだらうねえ。」

穂吉と呼ばれた梶は、三疋の中では一番小さいやうでしたが一番温和おとなしいやうでした。じつとまつすぐを向いて、枝にとまつたまゝ、はじめからおしまひまで、しんとしてゐました。

その木の一番高い枝にとまりからだ中銀いろで大きく頬ほほをふくらせ今の講義のやすみのひまを水銀のやうな月光をあびてゆらりゆらりとゐねむりしてゐるのはたしかに梶ふくろふのおぢいさんでした。

月はもう余程高くなり、星座もずるぶんめぐりました。蝸さそりざ座は西へ沈むとこでしたし、天の川もすっかり斜めになりました。

向ふの低い松の木から、さっきの年としよ老りの坊さんの梶が、斜に飛んでさっきの通り、説教の枝にとまりました。

急に林のざわざわがやんで、しづかにしづかになりました。風のためか、今まで聞えなかつた遠くの瀬の音が、ひゞいて参りました。坊さんの梶はゴホンゴホンと二つ三つせきばらひをして又はじめました。

「爾その時に、疾翔しつしよう大力たいりき、爾迦夷るかゐに告つげて曰いはく、諦あきらかに聴らけ、諦あきらかに聴らけ、善よく之これを思念しんねんせよ。我われ今いま汝なんぢに、梟鷄けうもろ諸もろの惡あく禽きん、離苦りくげ解脫げだつの道みちを述のべんと。

爾迦夷るかゐ、則すなはち兩翼りやうよくを開張うやうやし、度うやうやしく頸くびを垂たれて座ざを離はなれ、低ひく飛揚とびあげて疾翔しつしよう大力たいりきを讚嘆さんたんすること三さん匹びつにして、徐おもむろに座ざに復かへし、拜跪はいきして唯願ただふらく、疾翔しつしよう大力たいりき、疾翔しつしよう大力たいりき、たゞ我等われらが為ためにこれを説とき給たまへ。たゞ我等われらが為ために之を説とき給たまへと。

疾翔しつしよう大力たいりき微笑みごうして、金色こんじきの円光えんくわうを以もつて頭かうべに被かれるに、その光あまね遍あまく一座いざを照あし、諸鳥しよ歡あ喜ん充ん滿んせり。則すなはち説といて曰いはく、

汝等なんぢら審まびらか諸もろの惡あく業ごふを作ある。或あるは夜陰やいんを以もつて小禽せうきんの家いへに至いたる。時ときに小禽せうきん既すでに終日しゅうじつ日光にかりに浴あし、歌唄かばい跳躍てうやくして疲勞つかうをなし、唯ただ唯ただ甘美かんみの睡眠すいみん中ちゆうにあり。汝等なんぢら飛躍とひやくして之を握つかむ。利爪りせう深こくその身みに入り、諸もろの小禽せうきん痛苦たうく又また声こゑを発はするなし。則すなはち之を裂ひきて擅しんに噉食たんじきす。或あるは沼田せうでんに至いたり、螺蛤らかふを啄つむ。螺蛤らかふ軟泥なんじ中ちゆうにあり、心柔しんじゆうにして、唯温水おんみづを憶おもふ。時ときに俄にはかに身み空中くわうちゆうにあり、或あるは直ただちに身みを破やぶる、悶もん乱声らんしやうを絶たす。汝等なんぢら之を噉食たんじきするに、又また懺悔ざんげの念ねんあることなし。

斯かくの如ごときの諸もろの惡あく業ごふ、挙あげて数かずふるなし。惡あく業ごふを以もつての故ゆゑに、更さらに又また諸もろの惡あく業ごふを作ある。繼起けいぎして遂つひに竟はることなし。昼ひるは則すなはち日光にかりを懼おそれ、又また人ひと及および諸もろの強鳥きやうちゆうを恐おそる。心暫しばらくも安やす

らかなることなし、一度梟身を尽して、又新に梟身を得。審に諸の苦患を被りて、又
尽くることなし。で前の座では、捨身菩薩を疾翔大力と呼びあげるわけあり又、そ
の願成の因縁をお話いたしたぢやが、次に爾迦夷に告げて曰くとある。爾迦夷といふ
はこのとき我等と同様梟ぢや。われらのご先祖と、一緒にお棲ひなされたお方ぢや。今で
も爾迦夷上人と申しあげて、毎月十三日のご命日ぢや。いづれの家でも、梟の限りは、
十三日には梟の木の葉を取て参て、爾迦夷上人さまにさしあげるといふことをやるぢや、
これは爾迦夷さまが梟の木にお棲ひなされたからぢや。この爾迦夷さまは、早くから梟の
身のあさましいことをご覚悟遊ばされ、出離の道を求められたぢやげなが、たうとうその
一心の甲斐あつて、疾翔大力さまにめぐりあひ、つひにその尊い教を聴聞あつて、天上へ
行かした。その爾迦夷さまへのご説法ぢや。諦に聴け、諦に聴け。善く之を思念せよ
と。心をしづめてよく聴けよ、心をしづめてよく聴けよと斯うぢや。いづれの説法の座で
も、よくよく心をしづめ耳をすまして聴くことは大切なのぢや。上の空で聞いてゐたでは
何にもならぬぢや。」

ところがこのとき、さっきの喧嘩をした二疋の子供のふくろふがもう説教を聴くのは
厭きお互にらめくらをはじめめてゐました。そこは茂りあつた枝のかげで、まっくらでし

だが、二足はどつちもあらんかぎりりと眼を開いてゐましたので、ぎろぎろ燐りんを燃したやうに青く光りました。そこでたうとう二足とも一ぺんに嘖き出して一緒に、

「お前の眼は大きいねえ。」と云ひました。

その声は幸さいはひに少しつんぼの梟ふくろふの坊さんには聞えませんでした。が、ほかの梟たちはみんなこつちを振り向きました。兄弟の穂吉といふ梟は、そこで大へんきまり悪く思つてもぢもぢしながら頭だけはじつと垂れてゐました。二足はみんなのこつちを見るのを枝のかげになつてかくれるやうにしながら、

「おい、もう遁にげて遊びに行かう。」

「どこへ。」

「実相寺の林さ。」

「行かうか。」

「うん、行かう。穂吉ちゃんも行かないか。」

「ううん。」穂吉は頭をふりました。

「我今なんぢ汝なに、梟けうもろもろ諸もろの悪あく禽きん、離り苦く解げ脱だつの道を述べんといふことは。」説教が又続きました。二足はもうそつと遁にげ出し、穂吉はいよいよ堅くなつて、兄弟三人分一人で聴かうと

いふ風でした。

※

その次の日の六月二十五日の晩でした。

丁度ゆふべと同じ時刻でしたのに、説教はまだ始まらず、あの説教の坊さんは、眼を瞑つてだまつて説教の木の高い枝にとまり、まはりにゆふべと同じにとまつた沢山の梟どもはなぜか大へんみな興奮してゐる模様でした。女のふくろふにはおろおろ泣いてゐるものもありましたし、男のふくろふはもうとても斯うしてゐられないといふやうにプリプリしてゐました。それにあのゆふべの三人兄弟の家族の中では一番高い処ところに居るおぢいさんの梟はもうすっかり眼を泣きはらして頬ほほが時々びくびく云ひ、泪なみだは声なくその赤くふくれた眼から落ちてゐました。

もちろんふくろふのお母さんはしくしく泣いてゐました。乱暴ものの二足の兄弟も不思議にその晩はきちんと座つて、大きな眼をじつと下に落してゐました。又ふくろふのお父さんは、しきりに西の方を見てゐました。けれども一体どうしたのかあの温和おとなし

い穂吉の形が見えませんでした。風が少し出て来ましたので松の梢こずえはみなしづかにゆすれました。

空には所々雲もうかんでゐるやうでした。それは星があちこちめくらにでもなつたやうに黒くて光つてゐなかつたからです。

俄にはかに西の方から一疋びきの大きな褐かつしよく色ふくろふの梟うすが飛んで来ました。そしてみんなの入口の低い木にとまつて声をひそめて云ひました。

「やつぱり駄目だめだ。穂吉さんももうあきらめてゐるやうだよ。さつきまではばたばたばたばた云つてゐたけれども、もう今はおとなしく白うすの上にとまつてゐるよ。それから紐ひもが何だか變つたやうだよ。前は右足だったが、今度は左脚ひだりあしに結ゆはひつけられて、それに紐ひもの色が赤いんだ。けれどもたゞひとついゝことは、みんな大抵寝てしまつたんだ。さつきまで穂吉さんの眼を指で突つつかうとした子供などは、腹かけだけして、大の字になつて寝てゐるよ。」

穂吉のお母さんの梟は、まるで火がついたやうに声をあげて泣きました。それにつれて林中の女のふくろふがみなしいんしいんと泣きました。

梟の坊さんは、じつと星ぞらを見あげて、それからしづかにたづねました。

「この世界は全くこの通りぢや。たゞもうみんなかなしいことばかりなのぢや。どうして又あんなおとなしい子が、人につかまるやうな処ところに出たもんぢやらうなあ。」

説教の木のとなりねずみに居た鼠いろの鼻は恭々しく答へました。

「今朝あけ方近くなつてから、兄弟三人で出掛けたさうでございます。いつも人の来るやうな処ではなかつたのでございます。そのうち朝日が出ましたので、眩まぶしさに三疋とも、しばらく眼を瞑つぶつてゐたさうでございます。すると、丁度子供が二人、草刈りに来て居ましたさうで、穂吉もそれを知らないうちに、一人がそつとのぼつて来て、穂吉の足を捉つかまへてしまつたと申します。」

「あゝあはれなことぢや、ふびんはなしぢや、あんなおとなしいゝ子でも、何の因果ぢややら。できるなればわしなどで代つてやりたいぢや。」

林はまたしいんとなりました。しばらくたつて、またばたばたと一疋の鼻が飛んで戻つて参りました。

「穂吉さんはね、白の上をあるいてゐたよ。あの赤の紐を引き裂かうとしてゐたやうだつたけれど、なかなか容易ぢやないんだ。私はもう、どこか隙間すきまから飛び込んで行つて、手伝つてあげようと、何べんも何べんも家のまはりを飛んで見たけれど、どこにもあいてる

所はないんだらう。ほんたうに可哀さうだねえ、穂吉さんは、けれども泣いちやゐないよ。
」

梟のお母さんが、大きな眼を泣いてまぶしさうにしよぼしよぼしながら訊ねました。

「あの家に猫は居ないやうでございましたか。」

「えゝ、猫は居なかつたやうですよ。きつと居ないんです。ずるぶん暫らく、私はのぞいてゐたんですけれど、たうとう見えなかつたのですから。」

「そんならまあ安心でございます。ほんたうにみなさまに飛んだご迷惑をかけてお申し訳けもございません。みんな穂吉の不注意からでございます。」

「いゝえ、いゝえ、そんなことはありません。あんな賢いお子さんでも災難といふものは仕方ありません。」

林中の女のふくろふがまるで口口に答へました。その音は二町ばかり西の方の大きな藁屋根の中に捕はれてゐる穂吉の処まで、ほんのかすかにでしたけれども聞えたのです。

ふくろふのおぢいさんが度々声がかすれながらふくろふのお父さんに云ひました。

「もうさうなつては仕方がない。お前は行つて穂吉にそつと教へてやったらよからう、もうこの上は決してばたばたもがいたり、怒つて人に噛み付いたりしてはいけない。今日中誰

もお前を殺さない処を見ると、きつと田螺たにしか何かで飼つて置くつもりだらうから、今までのやうに温和おとなしくして、決して人に逆さからふな、とな。斯かう云つて教へて来たらよからう。」
梟ふくろふのお父さんは、首を垂れてだまつて聴いてゐました。梟おとの和尚をしやうさんも遠くからこれにできるだけ耳を傾けてゐましたが大体そのわけがわかつたらしく言ひ添へました。

「さうぢや、さうぢや。いゝ分別ついでぢや。序ついでに斯かう教へて来なされ。このやうなひどい目にあうて、何悪いことしたむくいぢやと、恨むやうなことがあつてはならぬ。この世の罪も数知らず、さきの世の罪も数かぎりない事ぢやほどに、この災難もあるのぢやと、よくあきらめて、あんまりひとり嘆なげんでない、あんまり泣けば心も沈み、からだもとかく損そこねるぢや、たとへ足には紐ひもがあるとも、今こゝへ来て、はじめてとまった処ところぢやと、いつも気軽かろでゐねばならぬ、とな、斯かう云うて下され。あゝ、されども、されども、とられた者は又別またぢや。何のさほりも無いものが、とや斯かう言うても、何にもならぬ。あゝ可哀あはれさうなことぢや不愆ふびんなことぢや。」

お父さんの梟は何べんも頭を下げました。

「ありがたうございます。ありがたうございます。もうきつとさう申し伝へて参ります。斯こんなお語ことばを伝へ聞いたたら、もう死んでもよいと申しますでございませう。」

「いや、いや、さうぢや。斯うも云うて下され。いくら飼はれるときまっても、子供心はもとより一向たよりのないもの、又近くには猫犬なども居ることぢや、もし万一の場合は、たゞあの疾翔しっしょうたいりき大力のおん名を唱へなされとな。さう云うて下され。おゝ不愆ふびんぢや。」

「ありがたうございます。では行つて参ります。」

梟のお母さんが、泣きむせびながら申しました。

「ああ、もしどうぞ、いのちのある間は朝夕二度、私に聞えるやう高く啼ないて呉くれとおつしやつて下さいませ。」

「いゝよ。ではみなさん、行つて参ります。」

梟のお父さんは、二三度羽ばたきをして見てから、音もなく滑るやうに向ふへ飛んで行きました。梟の坊さんがそれをじつと見送つてゐましたが、俄にはかにからだをりんとして言ひました。

「みな衆。いつまで泣いてもはてないぢや。ここの世界は苦界くがいといふ、又忍土とも名づけるぢや。みんなせつないことばかり、涙の乾くひまはないのぢや。たゞこの上は、われらと衆生と、早くこの苦を離れる道を知るのが肝要かんようぢや。この因縁いんえんでみな衆も、よくよく心をひそめて聞きなされ。たゞ一人でも穂吉のことから、まことに菩提ぼだいの心を発すなれ

ば、穗吉の功德又この座のみな衆の功德、かぎりもあらぬことなれば、必らずとくと聴ち聞きなされや。昨夜の続きを講じます。

爾その時に疾翔しつしょう大力たいりき、爾迦夷るかゐに告げて曰く、諦いはに聴あきらけ、諦あきらに聴らけ。善よく之これを思念しんねんせよ。我今なんぢ汝なに、梟鴟けうし諸もろの悪あく禽きん、離苦りくげ解脱だつの道みちを述べんと。

爾迦夷るかゐ、則すなはち両翼りやうよくを開張うやうやし、度うやうやしく頸くびを垂たれて座ざを離はなれ、低ひく飛揚とびあげて疾翔しつしょう大力たいりきを讚嘆さんたんすること三さん匝さつにして、徐おもむろに座ざに復かへし、拜跪はいきして唯願ただふらく、疾翔しつしょう大力たいりき、疾翔しつしょう大力たいりき、たゞ我等われらが為ためにこれを説とき給たまへ。たゞ我等われらが為ために之これを説とき給たまへと。

疾翔しつしょう大力たいりき微笑みごうして、金色こんじきの円光えんくわうを以もつて頭かうべに被おほれるに、その光あまね遍あまく一座いざを照あし、諸鳥しよ歡あそ喜こ充ちゆう満まんせり。則すなはち説といて曰いく、

汝等なんぢら審まじに諸しよの悪業あくごうを作る。或あるいは夜陰やゐんを以もつて小禽せうきんの家いへに至いたる。時に小禽せうきん既すでに終日しゆうじつ日光にっくわうに浴あし、歌唄かばい跳躍しやうごつして疲勞つかうをなし、唯唯ただ甘美かんびの睡眠すいみん中にあり。汝等なんぢら飛躍とびあげて之これを握つかむ。利り爪さう深くその身みに入り、諸しよの小禽せうきん痛苦たうく又また声こゑを発はするなし。則すなはち之これを裂ひきて擅おぼに噉たん食じきす。或あるいは沼田せうでんに至いたり螺蛤らかふを啄つむ。螺蛤らかふ軟泥なんじ中にあり、心柔しんじゆうにして唯温ただ水すいを憶おもふ。時に俄にはかに身空みんかう中にあり、或あるいは直ただちに身みを破やぶる、悶もん乱声らんしやうを絶たす。汝等なんぢら之これを噉たん食じきするに、又また懺悔ざんげの念ねんあることなし。

斯かくの如ごときの諸あの悪業あくごふ、挙あげて数かずふるなし。

悪業を以ての故に、更に又諸の悪業を作る。継起して遂つひに竟をはることなし。昼は則ち日光を懼おそれ、又人及諸の強鳥を恐る。心暫しばらくも安らかなることなし。一ひと度たび梟身けうしんを尽して、又新あらたに梟身を得、審つまびらに諸の患難かうむを被かりて、又尽くることなし。

で前の晩は、諸鳥歡喜充滿せりまで、文の如くに講じたが、此この席はその次ぢや。則ち説いて曰くと、これは疾翔大力さまが、爾迦夷上人のご懇請によつて、直ちに説法をなされたと斯かうぢや。汝等審つまびらに諸の悪業を作ると。汝等といふは、元來はわれわれ梟ふくろふとびや鴛うなどに対して申さるゝのぢやが、ご本意は梟にあるのぢや、あとのご文の罪相を拝するに、みなわれわれのことぢや。悪業といふは、悪は悪いぢや、業ごふとは梵語ぼんごでカルマというて、すべて過去になしたることのまだ報むくいとなつてあらはれぬを業といふ、善業悪業あるぢや。こゝでは悪業といふ。その事柄を次にあげなされたぢや。或は夜陰を以て、小禽せうきんの家に至ると。みなみなの衆しゆ、他人事ひとごとではないぞよ。よくよく自みづからの胸むねにたづねて見なされ。夜陰とは夜のくらやみぢや。以てとは、これは乗じてといふがやうの意味ぢや。夜のくらやみに乗じると、斯かうぢや。小禽の家に至る。小禽すずめとは、雀やまがら、山雀しじふから、四十雀しじふから、ひは、百舌もず、みそさざい、かけす、つぐみ、すべて形小にして、力ないものは、みな小禽ぢや。その形小

く力無い鳥の家に参るといふのぢやが、参るといふてもたゞ訪ねて参るでもなければ、遊びに参るでもないぢや、内に深く残忍の想を潜め、外又恐るべく悲しむべき夜叉相を浮べ、密やかに忍んで参ると斯う云ふことぢや。このご説法のころは、われらの心も未だ仲々善心もあつたぢや、小禽せうきんの家に至るとお説きなされば、はや聴法の者、みな慄然として座に耐へなかつたぢや。今は仲々さうでない。今ならば疾翔しつしよう大力さま、まだまだ強く烈しくご説法であらうぞよ。みな衆、よくよく心にしみて聞いて下され。

次のご文は、時に小禽せうきん既に終日日光に浴し、歌唄かばい跳躍して、疲労をなし、唯々ただただ甘美の睡眠中にあり。他人事ひとごとではないぞよ。どうぢや、今朝も今朝とて穂吉どの処を替へてこの身の上ぢや、」

説教の坊さんの声が、俄にはかにおろおろして変りました。穂吉のお母さんの鼻はまるで帛きぬを裂くやうに泣き出し、一座の女の鼻は、たちまちそれに従ついて泣きました。

それから男の鼻も泣きました。林の中はたゞむせび泣く声ばかり、風も出て来て、木はみなぐらぐらゆれましたが、仲々誰たれも泣きやみませんでした。星はだんだんめぐり、赤い火星ももう西ぞらに入りました。

鼻の坊さんはしばらくゴホゴホ咳嗽せきをしてゐましたが、やっと心を取り直して、又講義

をつづけました。

「みな衆、まづ試ためしに、自分がみそさぎいにでもなつたと考へてご覽らじ。な。天道てんとうさまが、東の空へ金こんじき色の矢を射なさるぢや、林樹は青く枝は揺るゝ、楽しく歌をばうたふのぢや、仲よくあうた友だちと、枝から枝へ木から木へ、天道さまの光の中を、歌つて歌つて参るのぢや、ひるごろならば、涼しい葉陰にしばしやすんで黙るのぢや、又ちちと鳴いて飛び立つぢや、空の青板をめざすのぢや、又小流れに参るのぢや、心の合うた友だちと、たゞ暫しばらくも離れずに、歌つて歌つて参るのぢや、さてお天道さまが、おかくれなされる、からだはつかれてとろりとなる、油のごとく、溶けるごとくぢや。いつかまぶたは閉ぢるのぢや、昼の景色を夢見るぢや、からだは枝に留まれど、心はなほも飛びめぐる、たのしく甘いつかれの夢の光の中ぢや。そのとき俄かにひやりとする。夢かうつつか、愕おどろき見れば、わが身は裂けて、血は流れるぢや。燃えるやうなる、二つの眼が光つてわれを見詰むるぢや。どうぢや、声さへ発たたうにも、咽喉のどが狂うて音が出ぬぢや。これが則すなはち利爪きこう深くその身に入り、諸もろもろの小禽せうきん痛苦又声を発するなしの意なのぢやぞ。されどもこれは、取らるゝ鳥より見たるものぢや。捕とらる此方こなたより眺むれば、飛躍して之を握つかむと斯うぢや。何の罪なく眠れるものを、たゞ一打ひとうちととびかゝり、鋭い爪つめでその柔な身体やはらかなからだをちぎる、鳥

は声さへよう発てぬ、こちらはそれを嘲笑あざわらひつゝ、引き裂くぢや。何たるあはれのことぢや。この身とて、今は法師にて、鳥も魚も襲はねど、昔おもへば身も世もあらぬ。あゝ罪業ざいごふのこのからだ、夜毎よごと夜毎の夢とては、同じく夜叉やしやの業をなす。宿業しゆくごふの恐ろしさ、たゞたゞ呆あきるゝばかりなのぢや。―

風がザアツとやって来ました。木はみな波のやうにゆすれ、坊さんの鼻も、その中に漂ふ舟のやうにうごきました。

そして東の山のはから、昨日の金角、二十五日のお月さまが、昨日よりは又ずうつと瘡やせて上りました。林の中はうすいうすい霧のやうなものでいっぱいになり、西の方からあの鼻ふくろふのお父さんがしょんぼり飛んで帰つて来ました。

※

旧曆六月二十六日の晩でした。

そらがあんまりよく霽はれてもう天の川の水は、すっかりすきとほつて冷たく、底のすなごも数へられるやう、またじつと眼をつぶつてみると、その流れの音さへも聞えるやうな

気がしました。けれどもそれは或は空の高い処を吹いてゐた風の音だったかも知れません。なぜなら、星がかげろふの向ふ側にでもあるやうに、少しゆれたり明るくなったり暗くなったりしてゐましたから。

獅子鼻ししはなの上の松林には今夜も梟ふくろふの群が集まりました。今夜は穂吉が来てゐました。来てはゐましたが一昨日をとしひの晩の処にでなしに、おぢいさんのとまる処よりもつと高いところで小さな枝の二本行きちがひ、それからもつと小さな枝が四五本出て、一寸盃ちよつきかづきのやうな形になつた処へ、どこから持つて来たか藁わらくづ屑や髪の毛などを敷いて臨時に巢がつくられてゐました。その中に穂吉が半分横になつて、じつと目をつぶつてゐました。梟のお母さんと二人の兄弟とが穂吉のまはりに座つて穂吉のからだを支へるやうにしてゐました。林の中のふくろふは、今夜は一人も泣いてはゐませんでした。怒つてゐることはみんな、昨夜ゆふべではありませんでした。

「傷みはどうぢや。いくらか薄らいだかの。」

あの坊さんの梟がいつもの高い処からやさしく訊ねました。穂吉は何か云はうとしたやうでしたが、たゞ眼がパチパチしたばかり、お母さんが代つて答へました。

「折角こらへてゐるやうでございます。よく物が申せないでございます。それでもどう

しても、今夜のお説教を聴聞ちやうもんいたしたいといふやうでございましたので。もうどうかまはずご講義をねがひたう存じます。」

梟の坊さんは空を見上げました。

「殊勝なお心掛けぢや。それなればこそ、たとへ脚をば折られても、二度と父母の処へも戻つたのぢや。なれども健全すこやかな二本の脚を、何面白いこともないに、振ねぢつて折つて放すとは、何といふ浅間あさましい人間の心ぢや。」

「放されましても二本の脚を折られてどうしてまあすぐ飛べませう。あの萱原かやはらの中に落ちてひいひい泣いてゐたのでございます。それでも昼の間は、誰も気付たれかずやつと夕刻、私が顔を見ようと出て行きましたらこのていたらくでございします。」

「うん。尤もつともぢや。なれども他人は恨むものではないぞよ。みな自らみづかがもとなのぢや。恨みの心は修羅しゆらとなる。かけても他人は恨むでない。」

穂吉はこれをぼんやり夢のやうに聞いてゐました。子供がもう厭あきて「遁にがしてやるよ」といつて外へ連れて出たのでした。そのとき、ポキッと脚を折つたのです。その両脚は今でもまだしんしんと痛みます。眼を開いてもあたりがみんなぐらぐらして空さへ高くなつたり低くなつたりわくわくゆれてゐるやう、みんなの声も、たゞぼんやりと水の中からで

も聞くやうです。ああ僕はぼくきつともう死ぬんだ。こんなにつらい位ならほんたうに死んだ方がいゝ。それでもお父さんやお母さんは泣くだらう。泣くたつて一体お父さんたちは、まだ僕の近くに居るだらうか、あゝ痛い痛い。穂吉は声もなく泣きました。

「あんまりひどいやつらだ。こつちは何一つ向ふのため為に悪いやうなことをしないんだ。それをこんなことをして、よこす。もうだまつてはゐられない。何かし返ししてやらう。」
一疋びきの若い梟ふくろうが高く云ひました。すぐ隣りのが答へました。

「火をつけようぢやないか。今度屑くづ焼きのある晩に燃えてる長い藁わらを、一本あの屋根までくはへて来よう。なあに十本も二十本も運んでゐるうちにはどれかすぐ燃えつくよ。けれども火事で焼けるのはあんまり楽だ。何かも少しひどいことがないだらうか。」

又その隣りが答へました。

「戸のあいてる時をねらつて赤子の頭を突いてやれ。畜生め。」

梟の坊さんは、じつとみんなの云ふのを聴いてゐましたがこの時しづかに云ひました。

「いやいや、みなの衆、それはいかぬぢや。これほど手ひどい事なれば、必らずあだ仇を返したいはもちろんの事ながら、それでは血で血を洗ふのぢや。こなたの胸が霽はれるときは、かなたの心は燃えるのぢや。いつかはまたもつと手ひどく仇を受けるぢや、この身終つて

次の生しやうまで、その妄まうしゆ執しゆは絶えぬのぢや。遂つひには共に修羅しゆらに入り鬪とう諍じやうしばらくもひまはないぢや。必らずともにさやうのたくみはならぬぞや。」

けたたましくふくろふのお母さんが叫びました。

「穂吉穂吉しつかりおし。」

みんなびくつとしました。穂吉のお父さんもあわてて穂吉の居た枝に飛んで行きました。がとまる所がありませんでしたからすぐその上の枝にとまりました。穂吉のおぢいさんも行きました。みんなもまはりに集りました。穂吉はどうしたのか折られた脚をふるふる云はせその眼は白く閉ぢたのです。お父さんの鼻は高く叫びました。

「穂吉、しつかりするんだよ。今お説教がはじまるから。」

穂吉はパチツと眼をひらきました。それから少し起きあがりました。見えない眼でむりに向ふを見ようとしてゐるやうでした。

「まあよかつたね。やつぱりつかれてゐるんだらう。」女の鼻たちは云ひ合ひました。

坊さんの鼻はそこで云ひました。

「さあ、講釈をはじめよう。みな衆座にお戻りなされ。今夜は二十六日ぢや、来月二十六日はみな衆も存知の通り、二十六夜待ちぢや。月ぐわつてんし天子山てんしのはを出いでんとして、光を

放ちたまふとき、疾翔大力、爾迦夷波羅夷の三尊が、東のそらに出現します。今宵は月は異なれど、まことの心には又あらはれ給はぬことでない。穗吉どのも、たゞ一途に聴聞の志ぢやげなで、これからさつそく講ずるといたさう。穗吉どの、さぞ痛からう苦しからう、お経の文とて仲々耳には入るまいなれど、そのいたみ悩みの心の中に、いよいよ深く疾翔大力さまのお慈悲を刻みつけるぢやぞ、いゝかや、まことにそれこそ菩提のたねぢや。」

梟の坊さんの声が又少し変りました。一座はしいんとなりました。林の中にもう鳴き出した秋の虫があります。坊さんはしばらく息をこらして気を取り直しそれから厳めしい声で願をたててから昨夜の続きをはじめました。

「梟鷄救護章 梟鷄救護章

諸の仁者掌を合せて至心に聴き給へ。我今疾翔大力が威神力を享けて梟鷄救護章の一節を講ぜんとす。唯願ふらくはかの如来大慈大悲我が小願の中に於て大神力を現じ給ひ妄言綺語の淤泥を化して光明顯色の淨瑠璃となし、浮華の中より清淨の青蓮華を開かしめ給はんことを。至心欲願、南無仏南無仏南無仏。

爾の時に疾翔大力、爾迦夷に告げて曰く、諦に聴け諦に聴け。善く之を思念せよ。我今

汝なんぢに梟もろもろ鴞もろもろ諸あくきんの悪りくげだつ禽りくげだつ離りくげだつ苦りくげだつ解りくげだつ脱りくげだつの道りくげだつを述りくげだつべんと。

爾すなは迦すなは夷すなは則すなはち両すなは翼すなはを開すなは張すなはし、度うやうやしく頸くびを垂くびれて座うやうやを離くびれ、低くびく飛くび揚くびして疾くび翔くび大くび力くびを讚くび嘆くびすること三さん三さん匝さんにして、徐おもむろに座おもむろに復おもむろし、拜はい跪きして願はいふらく疾はい翔はい大はい力はい、たゞ我はい等はいが為はいにこれはいを説はいき給はいへと。

疾こんじき翔こんじき大こんじき力こんじき、微こんじき笑こんじきして金こんじき色こんじきの円こんじき光こんじきを以もつて頭かうべに被かうべれるに、諸かうべ鳥かうべ歡かうべ喜かうべ充かうべ滿かうべせり。則かうべち説かうべいて曰かうべく、

汝つまびら等ら審らに諸あくきんの悪ら業らを作ある。或あるは夜あ陰いを以あて小せう禽きんの家せうに至きんる。時せうに小せう禽きん既すに終す日す日す光すに浴すし、歌か唄ばい跳か躍ばいして疲か勞ばいをなし、唯か唯ばい甘か美ばいの睡か眠ばい中かにあり、汝か等ばい飛か躍ばいして之かを握つかむ。利か爪り深りくその身りに入り、諸りの小り禽り痛り苦り又り声りを発りするなし、則りち之りを裂りきて擅ほにまたんじきに噉ほ食じす。或りは沼せう田でんに至せうり、螺ら蛤かを啄つむ。螺ら蛤か軟ら泥か中らにあり、心ら柔ににして唯ら温に水うを憶おもふ。時らに俄らに身ら空ら中らにあり、或らは直らちに身らを破らる、悶もん乱らん声らんを絶らんす。汝もん等らん之もんを噉らん食らんするに、又もん懺らん悔らんの念もんあることなし。

悪あ業くを以あての故くに、更あに又く諸あの悪く業くを作ある。繼あ起くして遂あに竟あることなし。昼あは則あち日あ光あを懼あれ又あ人あ及あ諸あの強あ鳥あを恐ある。心あ暫あらくも安あらかなることなし。一あ度あ梟あ身あを尽あして、又あ新あに梟あ身あを得あ。審あに諸あの患あ難あを被ありて、又あ尽あくることなし。

で前の晩は、斯かくの如ごときの諸の悪業、挙げて数ふることなし、まで講じたが、今夜はその次ぢや。

悪業を以ての故に、更に又諸の悪業を作ると、これは誠に短いながら、強いお語ことばぢや。先刻人間に恨みを返すとの議があつた節、申した如くぢや、一の悪業によつて一の悪果を見る。その悪果故に、又新なる悪業を作る。斯の如く展転して、遂つひにやむときないぢや。車輪のめぐれどもめぐれども終らざるが如くぢや。これを輪廻りんねといひ、流転るてんといふ。悪より悪へとめぐることぢや。継起して遂つひに竟をはることなしと云ふがそれぢや。いつまでたつても終りにならぬ、どこどこまでも悪因悪果、悪果によつて新に悪因をつくる。な。斯かうぢや、浮うかむ瀬とてもあるまいぢや。昼は則すなはち日光を懼おそれ、又人及諸の強鳥を恐る。心暫しばらくも安らかなることなし。これは流転の中の、つらい模様をわれらにわかるやう、直ちかに申されたのぢや。勿もつたいなくも、我等は光明の日天子にってんしをば憚はばり奉る。いつも闇やみとみちづれぢや。東の空が明るくなりて、日天子さまの黄金きんの矢が高く射出されるれば、われらは恐れて遁にげるのぢや。もし白昼にまなこを正しく開くならば、その日天子の黄金の征そ欠やに伐うたれるぢや。それほどまでに我等は悪業あくごふの身ぢや。又人及諸の強鳥を恐る。な。人を恐るゝことは、今夜今ごろ講ずることの限りでない。思ひ合せてよろしからう。諸の強鳥を

恐る。鷹たかやはやぶさ、又さほど強くはなけれども日中なれば鳥などまで恐れねばならぬ情ない身ぢや。はやぶさなれば空よりすぐに落ちて来て、こなたが小鳥をつかむときと同じやうなるありさまぢや、たちまち空で引き裂かれるぢや、少しのさからひをしたとて、何にもならぬ、げにもげにも浅間あさましくなさけないわれらの身ぢや。」

梟ふくろふの坊ちよつとさんは一寸声を切りました。今夜ももう一時のほの上りの汽車の音が聞えて来ました。その音を聞くと梟ふくろふどもは泣きながらも、汽車の赤い明るいならんだ窓のことを考へるのでした。講釈がまた始まりました。

「心暫しばらくも安らかなることなしと、どうぢや、みな衆、たゞの一時いつときでも、ゆつくりと何の心配もなく落ちて着いたことがあるかの。もういつでもいつでもびくびくものぢや。一度梟けうしん身を尽して又新あらたに梟身を得うと斯かうぢや。泣いて悔やんで悲しんで、つひには年老る、病気になる、あらんかぎりの難儀をして、それで死んだら、もうこの様な悪鳥の身を離れるかとならば、仲々さうは参らぬぞや。身に染み込んだ罪業ざいごふから、又梟けうしんに生れるぢや。斯かくの如ごとくにして百生しやう、二百生、乃至劫ないしごふをも互わたるまで、この梟身を免れぬのぢや。審つまびらかに諸の患難わづらひを蒙かうむりて又尽くることなし。もう何もかも辛いつらことばかりぢや。さて今東の空は黄金色きんになられた。もう月天子ぐわつてんしがお出ましなのぢや。来月二十六夜ならば、このお光

に疾翔しつしよう大力たいりきさまを拝み申すぢやなれど、今宵こよひとて又拝み申さぬことでない、みなの衆、
 ようくまごゝろを以て仰ぎ奉るぢや。」

二十六夜の金いろの鎌かまの形のお月さまが、しづかにお登りになりました。そこらはぼお
 つと明るくなり、下では虫が俄にはかにしいんと鳴き出しました。

遠くの瀬の音もはつきり聞えて参りました。

お月さまは今はずうつと桔梗ききやういろの空におのぼりになりました。それは不思議な黄金きん
 の船のやうに見えました。

俄かにみんなは息がつまるやうに思ひました。それはそのお月さまの船の尖とがった右のへ
 さきから、まるで花火のやうに美しい紫いろのけむりのやうなものが、ばりばりばりと噴
 き出たからです。けむりは見る間にたなびいて、お月さまの下すっかり山の上に目もさめ
 るやうな紫の雲をつくりました。その雲の上に、金いろの立派な人が三人まっすぐに立っ
 てゐます。まん中の人はせいも高く、大きな眼でじつとこつちを見てゐます。衣のひだま
 で一一はつきりわかります。お星さまをちりばめたやうな立派な瓔珞やうらくをかけてゐました。
 お月さまが丁度その方の頭のまはりに輪になりました。

右と左に少し丈の低い立派な人が合掌して立つてゐました。その円光はぼんやり黄金きんい

ろにかすみうしろにある青い星も見えました。雲がだんだんこつちへ近づくやうです。

「南無疾翔大力、南無疾翔大力。」

みんなは高く叫びました。その声は林をとゞろかしました。雲がいよいよ近くなり、捨身菩薩やしんぼざつのおからだは、十丈ばかりに見えそのかゞやく左手がこつちへ招くやうに伸びたと思ふと、俄にはかに何とも云へないゝかをりがそこらいちめんにして、もうその紫の雲も疾翔しやう大力の姿も見えませんでした。たゞその澄み切った桔梗ききやういろの空にさっきの黄金きんいろの二十六夜のお月さまが、しづかにかかつてゐるばかりでした。

「おや、穂吉さん、息つかなくなつたよ。」俄に穂吉の兄弟が高く叫びました。

ほんたうに穂吉はもう冷たくなつて少し口をあき、かすかにわらつたまゝ、息がなくなつてゐました。そして汽車の音がまた聞えて来ました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1975（昭和50）年7月15日初版第1刷

1983（昭和58）年12月20日初版第6刷

※底本は旧仮名ですが、拗促音は小書きされています。これにならない、ルビの拗促音も、小書きにしました。

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二十六夜

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>